

## 西洋医が見た中医のすごい威力

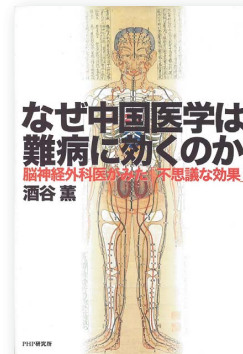
—「幻の書」といわれた感動の書、電子版で復活！！

酒谷 薫 著

# 『なぜ中国医学は 難病に効くのか』

—脳神経外科医が見た  
不思議な効果』

(PHP 研究所, 2002 年刊)



本書は、昨年8月に発足した日本中医学会の理事長をご担任いただいている酒谷薫先生の著書です。中医の世界では、酒谷先生といっても馴染みのない方々も多いかと思います。酒谷先生は、もともと中医の臨床家ではありません。西洋医学、それも第一線の脳神経外科の専門医で、中医とはなんの関係もない先生でありました。1984年に日本政府がODAで中国に無償提供した北京中日友好医院へ、脳外科の専門家として中国人医師を指導するために、6年間にわたって赴任されました。

そのときに、ご自身が担当されていた難病患者の症状がつつぎと改善してゆくのを目の当たりにされた酒谷先生は大いに驚き、患者たちに「どうしてそんなによくなったのだ」と質問されたところ、中医治療のお陰だと答えたといいます。それから酒谷先生は、“中医とは何ぞや?”という疑問をおもちになり、それらの患者たちに中医治療を行っていた中医師に中医学を逆に教授してもらう約束をされ、本格的に中医学を勉強されたといいます。その西洋医学と中医学を互いに教え合った“交換教授”のなかに、現在、広安門医院の副院長をされている全小<sup>しょうりん</sup>林先生や中日友好医院の指導者の史戴祥先生らがおられたということです。

本書には、以上のような北京時代の衝撃の体験が詳しく書かれています。酒谷先生が中医学とどのように出会われ、いかに中医学の世界観と臨床的威力に惹きつけられていったか、先生の劇的な思想的遍歴をつぶさに見ることができます。

私が本書をたまたま書店で見かけて一気に読み終え、たいへん感動を受けたものですから、ただちに酒谷先生にインタビューを申し込んだのが、10年前のことでした。その出会い以来、酒谷先生は、多くの人々にこの医学を知ってもらいたい、そのためになにが自分にできるか、いつも自問されておりました。

あるとき、先生は、「日本にはなぜ中医学会がないのですか」と質問されました。これだけの学問であるのに学会がないことを不思議に思われたのでしょうか。私からは、「本来学会は絶対に必要なのですが、30年来そういう動きは自発的には出てきていません。一方で、自分たちで勉強をし合う研究会は活発に行われています。先生方の主な関心は臨床力の向上にあって、学会組織を作るなどという大きな精力を取られる事業には興味をもたれないのでしょうか」と答えましたら、酒谷

先生は「では、私がお手伝いをしましょうか」とおっしゃったのです。以来数年の準備期間を経て、ようやく昨年に日本中医学会が正式に設立されました。まさか実現するとは思ってもよらなかった日本の学会組織が、現実に誕生しました。

大勢の賛同者の強い意志と協力がなければ不可能な事業ですが、酒谷先生の指導力と企画力、緻密な進行管理、熱意溢れる献身的行動がなくては実現できませんでした。日本の中医学派にとって、貴重な先生を得たことを喜ばずにおれません。

本学会はまた平馬直樹先生が生え抜きの中医学派のリーダーとして、学術面の中心におられます。学術的な軸がぶれないことは、この学問の生命線です。中医学の真髄をしっかりと守りながら、日本の土壌のなかで花咲かせてゆかねばなりません。そして、酒谷薫先生という、本来中医学派ではなかった部外の先生であるはずの先生が、中医学のためにこれほど私心なく献身的に協力してくださっています。本学会はきっと立派に成長するものと確信をしております。

本書は、もともと PHP 研究所から出版されましたが、その後、同社から増刷がされず、多くの方々が求められても入手できなかった本です。このたび、『日本中医学会雑誌』が発行されるにあたって、電子版で復活されることになりました。ぜひ多くの方々に読んでいただきたい書籍です。

東洋学術出版社会長 山本勝司

2011年1月

\*酒谷薫先生へのインタビュー記事は、下記に掲載されています。

『中医臨床』通巻91号 (Vol.23 No.4 2002年12月号)